

2 国際交流事業

本プログラムでは、非文字資料に関わる学術情報の交換と若手研究者の派遣・招聘を目的として、海外の研究機関との交流・提携事業を進めた。さらに、プログラムの研究事業を世界水準のものにするため、国際シンポジウムを開催して共同研究の成果を国内外の研究者に問いかけた。

I 海外提携研究機関との研究交流

本プログラム事業推進中、海外研究機関との学術交流や若手研究者の交流は、研究者間の研究発表、派遣研究員・訪問研究員の交流、国際シンポジウムへの代表者招待などといった形で行われた。その海外提携研究機関は、4か国8機関であり、それらの機関の内容を機関別に紹介する。

(1) 華東師範大学 (中国)

上海市にある総合大学であり、1951年に上海市内のいくつかの大学が合併して創立された。多くの学部を擁しているが、そのなかで近年発展がめざましいのが対外漢語学院である。そのなかに設置されている大学院は、博士課程まであり、幅広く中国文化の研究を進めており、中国各地から進学してくる。特に、民俗学界に影響のある中国民俗保護開発研究センターは、多くの民俗学研究者を養成している。

研究センターは世界各地での学術活動、学術協力を進めているが、日本研究者との交流も盛んに行われている。神奈川大学21世紀COEプログラムが提携したのはこの研究所である。

(2) 北京師範大学 (中国)

北京市にある総合大学である。特に、中文系は中

心的な存在であり、中国民俗学の開拓者鐘敬文教授や書家で日本でも有名な啓功教授など多くの優れた教授を擁し、活発に学術研究を展開してきた。

2002年以降、民俗学はいくつかの専門研究組織に分かれて活動を展開しているが、神奈川大学21世紀COEプログラムが提携したのは、民俗学与文化人類学研究所である。民俗学を中心としたワールドワークを行い、大きな成果をあげており、研究メンバーの近年の成果としては詳細な民俗誌である『中国民俗文化誌』の北京編を地区毎にまとめて刊行している。

(3) 浙江工商大学 (中国)

1911年、杭州中等商業学堂として設立され、1980年には大学に昇格し浙江商学院となった。さらに2004年に浙江工商大学と改名し、経営経済を中心とする総合大学になった。本学COEと研究交流を行っているのは、日本文化研究所である。

もともと同研究所は浙江大学に付置されていたが、工商大学が総合大学になったのを機に、研究所とそれに属するほとんどのメンバーが移籍し、中国江南地域の日本研究の中心として現在に至っている。近年は、日本古典文化から現代のポップカルチャーに及ぶ、ユニークな研究者が育ってきている。

(4) 中山大学 (中国)

広東省広州市にある歴史のある総合大学である。1924年に孫文によって創立された。中文系は重要な位置を占める学部であり、古い歴史を持つが、近年は中文系を基礎に設置された中国非物質文化遺産研究センターの活動が注目されている。

これは、日本の21世紀COEプログラムに相当

する中国政府教育部人文社会科学重点研究基地であり、国からの補助金によって大規模な調査研究を展開している。研究活動の柱は、伝統戯曲の調査、口頭文芸と民俗の調査研究、それに非物質文化遺産保護対策の三つである。本プログラムとの提携は2005年からであるが、相互訪問は頻繁に行われ、中山大学開催のシンポジウムにも参加している。

(5) 香港大学 (中国)

香港大学は、1877年に創立された香港医科大学を前身とする香港でもっとも歴史の古い大学である。現在は、医学部、工学部のほか、文学部、教育学部、人文学部、社会学部など文化系の学部を有する香港を代表する大学である。

なかでも、香港大学のアジア研究 (Centre of Asian Studies, 亜洲研究中心) と日本研究 (Faculty Arts, Japanese Studies) の研究が高いことに定評があり、神奈川大学21世紀COEプログラムとは、COE研究拠点の一つである大学院中国言語文化専攻の紹介でこれらの学部や研究機関と提携関係を結び、活発な研究者の交流とシンポジウムへの参加などを実現している。

(6) 延世大学校 (韓国)

延世大学校は朝鮮時代末期の1885年に設立されたセブランス医学専門学校を前身とするが、1970年代以降は文化系に関連する支援を大幅に拡大している。同大学付設の中央博物館は1928年に開館し、韓国の大学付設の博物館の嚆矢といわれ、特に、韓国の伝統文化に関連する文化資源の収集と研究には定評がある。

また、近年は韓国の儒教と朝鮮時代の古典研究をリードする「国学研究院」の活動が注目を集めている。神奈川大学21世紀COEプログラムは、延世大学校の中央博物館と「国学研究院」、そして、人文学部と活発な情報交換と人的交流を行っている。

(7) ブリティッシュコロンビア大学 (カナダ)

カナダ太平洋岸の中心都市バンクーバーにある総合大学である。1961年に設立されたアジア研究学

部はカナダのみならず、北アメリカにおけるアジア研究をリードする存在である。

また、この学部の研究を支えるアジア研究所は1978年に設立され、現在は日本研究センター、中国研究センター、韓国研究センターなど5つのセンターを持ち、日本はもちろんのこと、アジア各地域での歴史、文学、社会、言語を専攻する研究者を擁している。特に、日本については、日本古典文学と日本文化に関する研究者が揃っており、北米における日本文化研究の中心的存在となるべき条件が整っている。

(8) サンパウロ大学 (ブラジル)

サンパウロ大学日本文化研究所は、広大なサンパウロ大学の構内の一角にある。同大学には文化人類学のレヴィストロースも席を置いたことがあり、人類文化の研究には長い伝統を持ち、民俗博物館もある。

研究所は、鈴木梯一、前川隆らブラジルにおける日本学の草創期の研究者によって創立された。現在、所長以下教授、助教授7名と職員数名で構成され、サンパウロ州のみならず、ブラジルにおける日本文化研究のセンターとなっている。従来、日本語、日本文学の研究が中心であったが、近年、文化人類学のスタッフを加え、日本文化全体に研究対象を広げつつある。

Ⅱ 若手研究者招聘事業

PD・RAの海外提携研究機関への派遣については既述した通りであるが、海外提携研究機関の若手研究者を招いて共同研究を推進する訪問研究員制度についても、期待以上の経過が得られた。21世紀COEプログラムにおける非文字資料の研究成果は輸出可能なモデルであり、外国人留学生及び研究員の受け入れは、それを具体化する有効な方法であった。

大学院歴史民俗資料学研究科では、すでにフランス・中国・韓国・コンゴ・オーストラリアなどからの後期課程留学生、さらに日本常民文化研究所では

アメリカ合衆国・カナダ・ブラジル・中国・韓国などの若手研究者を外国人研究員として受け入れ、国際的な交流と研究上の協力関係に大きな成果をあげているが、訪問研究員の受け入れはそれを一層発展させることになった。本プログラム推進期間中、中国17名、韓国1名、ブラジル4名、カナダ2名など合計24名の若手研究者を受け入れた。

招聘は2週間程度と短期であるが、それによって、派遣研究員と同様、将来、国際的に活躍できるような研究者に育っていくための基礎が作られることを期待している。24名の訪問研究員は、いずれも日本の非文字資料研究を課題とする若手研究者たちであり、日本で収集した資料や文献を基礎に博士論文を完成させた者もいる。



訪問研究員との交流会

2004年度～2007年度 海外提携研究機関からの訪問研究員一覧

2004年度

氏名	所属研究機関等	受け入れ期間	指導教員 (チューター)	研究課題
JIANG JING 江 静	浙江大学日本文化研究所 専任講師 浙江大学人文学院 中国古代史専攻院生	2004年11月29日～ 2004年12月12日	三鬼清一郎 (網野暁)	日中交流史
HAN TONGCHUN 韓 同春	北京師範大学民俗学与 文化人類学研究所 北京師範大学大学院 民俗学専攻院生	2004年12月1日～ 2004年12月14日	福田アジオ (彭偉文)	民俗学
YOON HYUNJIN 尹 賢鎮	延世大学校 中央博物館学芸員 高麗大学校ビジュアル カルチャー専攻院生	2004年12月6日～ 2004年12月19日	中島三千男 (金花子)	韓国近現代美術史
MAO QIAOHUI 毛 巧暉	華東師範大学中国民俗 保護開発研究センター 華東師範大学大学院 民俗学専攻院生 山西師範大学助手	2004年12月12日～ 2004年12月25日	佐野 賢治 (ムカイダイス)	女性民俗
CHAMAS FERNANDO CARLOS	サンパウロ大学 日本文化研究所 サンパウロ大学 日本文化専攻院生	2005年1月28日～ 2005年2月11日	橘川俊忠 (永井美穂)	日本文化

2005年度

YUE YONGYI 岳 永逸	北京師範大学民俗学与 文化人類学研究所教員	2005年7月15日～ 2005年7月28日	山口建治 (宮本大輔)	都市民俗学 民間信仰
YIN XIAOFEI 尹 笑非	華東師範大学中国民俗 保護開発センター 華東師範大学大学院 民俗学専攻院生	2005年9月17日～ 2005年9月30日	廣田律子 (川島純枝)	民俗学
WANG XIN 王 欣	浙江大学客員研究員 浙江工商大学教員 (助手)	2005年11月8日～ 2005年11月21日	中村政則 (丸山泰明)	教科書における 中国関係の挿絵
KAUPATEZ DIOGO	サンパウロ大学 日本文化研究所 サンパウロ大学 日本文化専攻院生	2005年11月13日～ 2005年11月29日	田上 繁 (土田拓)	北斎・北斎漫画・ 浮世絵
CHAN WINGYAN 陳 穎恩	香港大学日本文化研究学系 香港大学大学院 現代日本経済史専攻院生	2005年12月5日～ 2005年12月18日	田島佳也 (藤永豪)	日本の都市計画、 経済環境、 市民生活
SONG JUNHUA 宋 俊華	中山大学 中国非物質文化遺産 研究センター助教授	2006年2月22日～ 2006年3月7日	鈴木陽一 (王京)	非物質文化遺産

2006年度

DAI LAN 戴 嵐	華東師範大学 中国民俗保護開発 研究センター 華東師範大学大学院 民俗学専攻博士生	2006年7月6日～ 2006年7月19日	中村ひろ子 (彭偉文)	日本の童話に 登場する少女 の挿絵
CAO RONG 曹 栄	北京師範大学文学院 民俗学与文化人類学 研究所博士生	2006年9月2日～ 2006年9月15日	佐野 賢治 (劉 湯氷)	鎖国政策下の 日本天主教或い は基督教信仰
WONG CHIHANG 王 志恒	香港大学 日本ドラマ専攻修士生・ RA研究員	2006年10月7日～ 2006年10月20日	孫安石 (武吉彩華・ 康正梅)	日本のTVドラマ の制作と視聴者 動向
LIU XIAOCHUN 劉 曉春	中山大学 中国非物質文化遺産 研究センター助教授	2006年10月2日～ 2006年10月15日	香月洋一郎 (宮本大輔・ 彭偉文)	人類文化研究非文 字資料体系化及び 民俗学相關研究・ 資料調査学術研究
WA YUHUA 吳 毓華	浙江工商大学 日本語文化学院教員 (助手)	2006年10月1日～ 2006年10月14日	鈴木陽一 (丸山泰明)	『清末民初報刊図 画集成』におけ る日本像
KARASAWA DANIELA 唐沢 ダニエラ	サンパウロ大学大学院 日本語・日本文学・ 日本文化修士課程	2006年12月2日～ 2006年12月18日	的場昭弘 (國弘暁子)	ブラジルにおける 日本マンガのロー カル化プロセスに 関する研究
BENESCH OLEG	ブリティッシュ コロンビア大学 アジア研究専攻博士課程	2006年11月21日～ 2006年12月4日	橘川俊忠 (丸山泰明・ 本田佳奈)	1895年～1945年 におけるの武士道 精神の発達につい て

2007年度

NISHIMURA MASHIBA 西村 真志葉	北京師範大学 ポストドクター	2007年7月25日～ 2007年8月7日	中村ひろ子 (土田拓)	公私研究機関にお ける非文字文化再 構成の実践につい ての調査研究
YI XIAOLONG 衣 曉龍	華東師範大学 中国民俗保護 開発センター博士生	2007年7月26日～ 2007年8月8日	田上 繁 (彭偉文)	浮世絵の中の 日本らしさ
JIANG MINGZHI 蔣 明智	中山大学 中国非物質文化遺産 研究センター副教授	2007年10月1日～ 2007年10月14日	山口 建治 (王京)	中日龍母伝説と 信仰の比較研究
GLAUJOR CARLOS	サンパウロ大学大学院 日本語・日本文学・ 日本文化修士課程	2007年10月1日～ 2007年10月17日	孫安石 (ムンシ・ ロジェ・ ヴァンジラ)	民族性ー沖縄から ブラジルに渡った 人と文化
XU HAIHUA 許 海華	浙江工商大学 日本語文化学院教員	2007年10月10日～ 2007年10月23日	河野通明 (小野地健)	画像資料に見ら れる明代中国人 の日本認識
PETRUCCI MARIA GRAZIA	ブリティッシュコロンビア 大学 大学院博士課程	2007年10月28日～ 2007年11月11日	田島佳也 (佐々木弘美)	日本の海賊とポル トガル商人の経済 的・宗教的關係に ついて

Ⅲ 国際シンポジウム

プログラムの研究事業を世界的水準のものにするため、国際シンポジウムを開催して共同研究の成果を国内外の研究者に問いかけた。

プログラム事業3年目となる2005年度には、第1回国際シンポジウム「非文字資料とはなにか―人類文化の記憶と記録―」を開催した。人間諸活動とその結果生み出されるものは、文字に記録されたものにとどまらず、音声・図像・写真・映像の形で記録され、道具・建築物のように造形化され、匂い・味覚など人間の感性や身振りは身体に刻まれ、自然と人間の交渉史は土地景観として表れる。そこで、非文字資料のうち写真・版画・身体技法・民具に焦点をあて、「非文字資料とはなにか」という命題を深化させると共に、それらの非文字資料を体系化する方法を模索することをテーマに掲げた。特に、国内外で非文字資料に関わるさまざまな分野で先駆的な研究を行っている研究者を招いて報告していただき、今後、本プログラム研究を進めていく上での指針とした。

翌2006年度に開催した第2回国際シンポジウム「図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く」では、過去3年間の調査研究を基礎に、その共同研究の成果を世に問うことを課題とした。シンポジウムは、4つのセッションに分け、非文字資料をめぐる方法論について問題提起を行い、それを受けて、それぞれ図像、民具、景観に焦点をあて、そこから読み取れるものが何か明らかにし、それらの報告や討論を踏まえて、非文字資料を統合・体系化する方法を模索した。

最終年度の2007年度には、第3回国際シンポジウム「場の記憶・からだの記憶 非文字資料研究の新地平」を開催した。このシンポジウムでは、これまで取り組んできた非文字資料のなかから、特に地域研究と身体技法に関わる成果を、新たに開発したシステムにより情報発信することを試みた。1日目の報告内容は、地域という「場」に人類活動の記憶を見出すための情報発信であり、2日目の報告内容は、身体技法という人間の「からだ」に刻印された

人類文化の記憶を読み取るための情報発信である。

なお、最終となるこのシンポジウムでは、報告終了後、総合討論の時間を設けて、本プログラムの総括を行った。

3回開催した国際シンポジウムのすべてに、海外提携研究機関の代表者を招待し、学術的ならびに人的な国際的交流関係を深めた。また、どの国際シンポジウムにおいても、本プログラムの研究内容について、国内外の研究者から貴重な批判と提言をいただき、大きな成果をあげることができた。



第1回 国際シンポジウム ポスター



第3回 国際シンポジウム 総合討論